

平成 26 年度 福島県主催
大学生の力を活用した集落活性化調査委託事業

広野町箒平地区 調査報告書

平成 27 年 3 月 復興大学 T-Na (ティーナ)

◆目次

<□調査の目的と方法>

1. 調査に至る経緯
2. 活動報告

<□箒平地区の概要>

1. 位置
2. 人口
3. 地区の特徴
4. 地区の問題点
4. 地区の良い特徴

<□まとめ>

1. 今後の我々の関わり方
2. おわりに

□調査の目的と方法

<□ー1, 調査に至る経緯>

我々は復興大学・復興人材育成教育コース (<http://www.fukkou-daigaku-jinzai.jp/>) という仙台市の教育プログラム受講生の自主ゼミから派生した、T-Na (ティーナ) という任意団体である。我々は 2014 年 4 月より福島県双葉郡広野町において、広野町役場と協働し、駅前に町民の方々の交流スペースとなるようなカフェを建設するプロジェクト (以下「建設プロジェクト」と呼ぶ) を町民の方々に参画頂きながら進めている。建設プロジェクトを進めるにあたって、我々は建材に地元木材をできる限り活用し、風評被害の払拭に少しでもつながるような建物にしようと考えた。そして古くから広野町における木材の収集地であった箒平集落を役場の方からご紹介いただき、町の概要把握も兼ねてこの集落活性化事業に参画する運びとなった。

・調査実施者

東北大学准教授 窪俊一
東北大学 関脩大
東北大学 乳井亮久
東北大学 伊藤健太
東北大学 戸嶋彩乃
東北学院大学 立花理砂
東北大学 沖垣貴大
東北大学 山本憲弘

<□ー2, 活動の記録>

【8月】

- ・ 箒平地区初訪問
- ・ 調査計画検討

【9月】

- ・ 大学生の力を活用した集落復興支援事業応募及び委託契約
- ・ 行政区長とともに山地フィールドワーク
- ・ 建築家の先生と集落の今後を考えるワークショップ

【10月】

- ・ 月に2回の定期訪問開始

【11月】

- ・ 地元 NPO 法人浅見川ゆめ会議のイベントに参加

【12月】

- ・ 成果発表会に参加

□箒平地区の概要

<□ー1, 位置>



図1 広野町と箒平地区の位置

広野町はいわき市から車もしくは電車で約30分、福島第一原発からは約23kmの位置にある。箒平地区は浅見川という川の上流に位置し、中心部からは約20km離れていて車で山道を約20分登った場所にある。住所は福島県双葉郡広野町浅見川字上箒平・下箒平であり、箒平地区は上箒平と下箒平に分かれている。

<□-2, 人口>

世帯数：5世帯

人口：9人（男性5人、女性4人）

元々広野町の市街地と2拠点居住する方もいたそうだが、震災以降はいわきの仮設住宅も含めて3拠点居住する方もいるという。

<Ⅱ-3, 地区の特徴>

箒平地区はかつては薪炭の生産地として栄え、広野小学校の分校なども存在していた。かつて童謡「とんぼのめがね」が作詞された土地でもあり、今なお広野町では毎年童謡まつりが行われ「とんぼのめがね」が歌われている。町民の方にお話を伺うと、高齢の方にとっては馴染み深い土地のようだが、若者の中には行ったこともない人もいることがわかった。

近年は全国の集落と同様に衰退し、平成21年時点で世帯数が9世帯、人口が18人と、かなりの限界集落であった。そこに追い打ちをかけるように2011年に原発事故が発生し、居

住者の半数は集落を離れていったようだが、今でも家を残している方が多いので正確な居住者数はつかめなかった。

<□-4, 箒平地区の問題点>

・イノシシなどの獣害

現在箒平地区ではイノシシなどの動物が農作物を食い荒らす被害が深刻化している。これらの動物は放射性物質を体に蓄積してしまっているため、猟銃で捕獲してもかつてのように売れないため、捕獲される機会が少なくなり数が増加しているという。

・山菜やキノコ、川魚が食べられない

放射性物質の影響で以前であれば食べることができていた食料が食べられなくなっている。箒平で暮らす数少ない人々の楽しみであったロハスな暮らしも現在ではできなくなっているといえる。

<□-5, 箒平地区の良い特徴>

・放置された杉山

約 50 年前、国の指示で日本の至る所に杉が植林された。箒平においても集落の周辺に大量の杉が植えられている。しかし、これらの杉は外材の輸入などの原因で売れなくなり、現在林業を生業としている人もいなくなり、山は放置されている。荒れた山は土砂崩れの原因となる。これらの杉は現在建築材料として利用するのにちょうどいい時期になっている。林業が成り立たなくなった今、誰がどのようにこれらの“宝”を切り出していくのが課題である。

・道楽で畑仕事や山仕事をする人々

現在箒平にはほぼ人は住んでいない。しかし集落の外に住んでいる、元箒平の住民が週末になると畑仕事や山仕事をしに箒平に帰ってくる。彼らは道楽でやっているというが、その仕事ぶりを見るととても素人のものとは思えないものばかりである。

彼らは畑をつくる、木を切る、家を建てる、あらゆることを一人でこなす。都会で育った我々からするといわゆるスーパーマンである。

今、このような人はどんどん少なくなってきている。彼らの経験、知識、生き方をどのように次の世代に受け継いでいくのが重要である。

□. まとめ

<□-1, 今後の我々の関わり方>

我々としては、今後も継続して箒平地区に通い、住人の方々のライフスタイルや技術を学んで行く方針である。月に2回程度集落に通って町人の方々とコミュニケーションを継続して図り、我々自らが現代人が失った技術や暮らし方を受け継ぐ主体となっていこうと考えている。

また、どの程度使えるかは未定であるが、建設プロジェクトにも箒平地区の木材を使用していきたいと考えている。地元木材が町の建築に使われるという、建築と林業を媒介とした人間と自然の関わり合いを再考するため、ぜひ積極的に活用していきたいと思う。

<□-2, おわりに>

今後箒平集落のように活性化に向けて手立てを見出すことが非常に困難な限界集落というのはとても増えてくると考えられる。このような集落とどう関わっていくのか、縮小社会の日本にとって喫緊の課題である。

今回述べた方策が活性化案として十分であるか正直わからないが、今後も継続して集落に通い住人の方々の話を聞き、どうすればよいか模索し続けようと思う。